

平成16年は夏以降台風等による風水害が頻発し、10月23日には新潟県で中越地震が発生しました。被災地では、迅速に災害ボランティアセンターが設置され、救援活動が展開されました。災害時の公私協働による救援体制やボランティア活動の進め方など、多くの課題が明らかになり、今後の検討が求められています。今号では、被災地で福祉救援・ボランティア活動を担当したボランティアコーディネーターの視点から、ニーズの状況や果たした役割、課題を振り返ります。

地縁の強い土地では 地縁を活かしたボランティアを

台風23号豪雨災害(兵庫県豊岡市)の場合

水害ボランティアセンターを即座に立ち上げ

10月20日に来襲した台風23号による豊岡市の水害では、市社協内に水害Vセンターを22日に立ち上げた。立ち上げ時には社協(豊岡市、兵庫県)、青年会議所(JC)、行政(豊岡市、兵庫県)、シャンティ国際ボランティア会が運営に携わったが、震災経験のあるスタッフは県社協とシャンティ国際ボランティア会のスタッフだけで、水害Vセンターとしてはノウハウがない厳しい状態だった。水害Vセンターが立ち上がった翌23日にはボランティアの受け入れを開始し、11月12日にセンターを閉鎖するまでに活動したボランティア数は延べ11,000人を超えた。

依頼を受けたボランティア活動は、初めの2週間はとにかく人海戦術での泥のかきだしや家の掃除などに終始した。

現場に近いほどニーズは見えてくる

支援において一番困ったのは「ニーズが出てこない」ことだった。市外から来たVに対する心理的な距離感が大きいことが原因と思われる。「ボランティア」や「NPO」に対して考え方も言葉もなじみがなく、地縁が強い地域でもあり外に対してなかなか支援を求めないという傾向があった。

ニーズが見えてこないときは、まず現地に行くことだと思ふ。物理的に被災地に近いほど、状況は見えやすくなる。途中から2箇所の水害Vセンターの出張所を設けたが、被災者の声が集まってくるようになった。

水害Vセンターに入ってくる声を、いろいろな形でフィードバックすることに心掛けた。現場を一番よく見て、被災者の声を聞いているのはボランティアなので、コーディネーターが動けないときは、帰ってきたボランティアにこまめに声をかけて話をきくようにした。ボランティアには活動報告書を書いてもらったが、文字にならない大切な情報も多い。そして聞いただけでは判断しかならなかつたら、自分で現場に出るのが一番だと思ふ。

その他水害Vセンターの体制として、各担当セクションでの課題や把握した内容をリーダーミーティングで出し合い、議論する体制をとった。



豊岡市水害Vセンター本部

力を発揮した 地元青年会議所や 行政職員の役割

地元のJCが大きな力を発揮した。運営スタッフとして一人が継続して関わってもらった他、地元住民に対するニーズの掘り起こしやV活動への理解を求める活動を担当。JCの全国ネットワークを通じてボランティアを募集したり、構成団体に建設会社などが多い強味を活かして、資器材の手配などをスムーズに行うこともできた。

その他、市役所の広報課職員が情報担当として水害Vセンターのスタッフに加わった。救援物資やごみ収集など、災害救援活動は行政につながる仕事が多くあるため、窓口として非常にうまく機能した。



泥まみれの材木や瓦を運び出す作業が続く

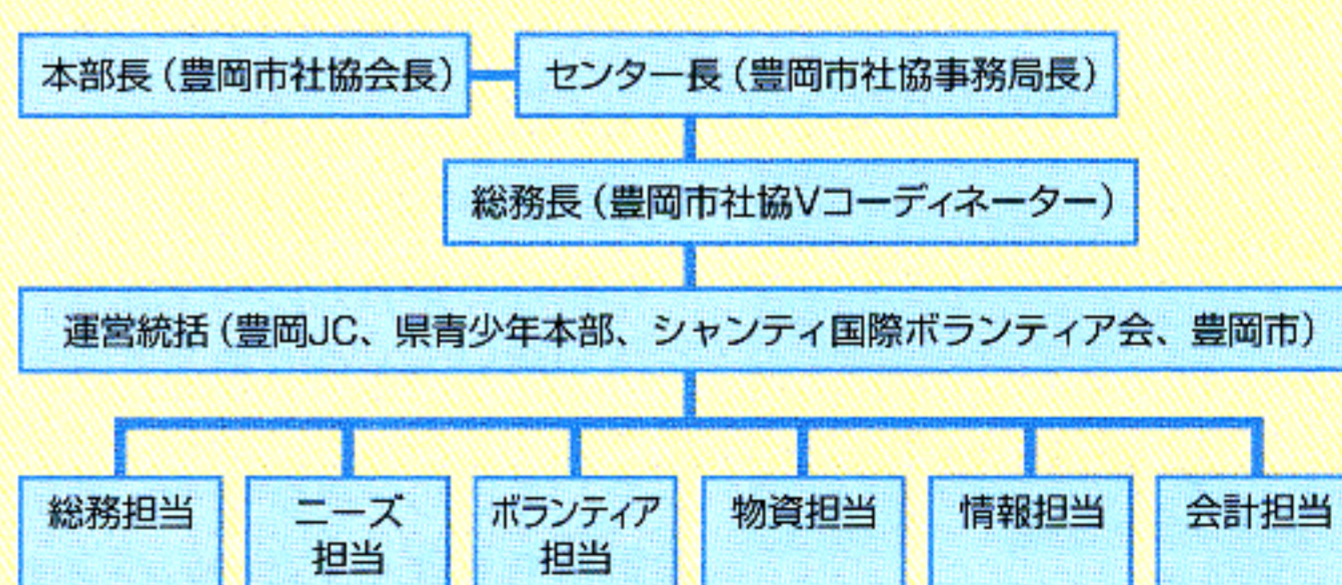
臨機応変にニーズに対応する

被災後一週間を過ぎた頃から、ニーズの内容に変化が出てきた。庭木の手入れをしてくれというものや、工場や商店の片付けまで要望が出てきて、どこまでボランティアに頼むのかの境界線があやふやになってきた。Vコーディネーターは事前に依頼内容を聞いているが、家族構成や緊急性などの状況もできるだけ聞いておくことも重要である。

また、水害Vセンターの中に、セクションに属さず臨機応変に行動できる人材がいると、判断しづらいケースへの対応や現場の状況確認などにあたることができる。

2週間を超えると被災者も徐々に日常を取り戻しはじめ、ニーズは小康状態になった。

豊岡市水害ボランティアセンター組織図



地元の顔がつながるコミュニケーションが 災害支援を助ける

社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA) 緊急救援室長
関 尚士さん
<http://www.jca.apc.org/sva/>

2003年7月の宮城県北部連続地震の時は、早い段階から社協などの地元関係者が支援活動に入ったんです。日常的に社協を支えてきたおじいちゃん、おばあちゃんたちのサークルと一緒に地域を回って歩きました。「どうだい、だいじょぶかい」と声をかけて一軒一軒訪ねて回りました。ある家では、家の中はもう足の踏み場もないくらいぐしゃぐしゃになっていて、そこにおばあちゃんがひとりで暮らしていました。

ボランティアセンターにニーズがあがってこないのは、何を頼んでもいいかわからないからです。「タンスを動かしてと頼んでいいよ」とか言って回りました。そういうことができるのは、日頃から社協が地域の人たちとつながっているということの証拠です。社協の機能は、日常だけでなく、災害時にこそ働くと思います。

災害に遭遇することは、実は新しい町のきずなや、地域社会のあり方を生み出すチャンスときでもあり、その時社協などの地域の関係者がどう動くかが問われていると思います。いわば「災害文化」として、災害をポジティブに捉え直し、その視点を持って災害救援、復興活動に取り組んでいくことを自ら期すと共に、全国それぞれの地域での今後のとりくみを期待しています。